堂島、北新地に生きて　大阪本社旧社屋

■新編集講座 ウェブ版　第90号　2017/12/15

毎日新聞社　技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長）　三宅　直人

ちょうど四半世紀になります。25 年前の 1992 年 12 月 12 日、毎日新聞の大阪本社は、堂島の旧社屋での紙面制作を終えて、西梅田の現社屋に移転したのでした＝**右図参照**。大阪有数のビジネス街・堂島に位置し、これまた大阪随一のネオン街・北新地に隣接する旧社屋。街のにぎわいや人々の喜怒哀楽がそのまま伝わる、文字通りの「情報の交差点」でした。私は 87 年に東京から大阪に転勤し、堂島最後の時代を体験しました。

社屋移転の特集記事に添付された地図。まだ堂島が「現社屋」

(上)①大阪本社旧社屋（左）と毎日大阪会館
(下)②扉を手で開閉するエレベーター

■　新聞社やテレビ局が集結

この「新編集講座」でも以前に取り上げたように（※）、大阪本社旧社屋は大正時代の建築で、レトロな雰囲気の建物＝**写真①**。内部には、昔の映画に出てきそうな手動式エレベーターもありました＝**写真②**。

※　41 号「母と私の堂島物語」2015 年 12 月 1 日
　　66 号「堂島最後の日　大阪本社移転の思い出」16 年 12 月 15 日

建物はクラシックですが、周辺では最先端の情報が飛び交っていました。隣接する毎日大阪会館に毎日放送（MBS）のニュース取材部門が入っていたほか、前の大通り（四つ橋筋）を数分歩くと、朝日新聞社と産経新聞社が、それぞれ大阪本社を構えていました。周辺には地方紙や電通の支社もあり、マスコミ関係者が集結していたのです。

その昔、毎日と朝日はスクープがあると号外を発行、相手本社前でばらまきライバルにダメージを与えた――という言い伝えは都市伝説（つまり作り話）だと思います。でも、喫茶店で密談しているうち声が大きくなり、居合わせた他社に特ダネが筒抜けになったとか、地方支局時代に知り合った他社の同期生と居酒屋で鉢合わせし、即席の同窓会を開いたとか、マスコミ街らしいエピソードは多々ありました。

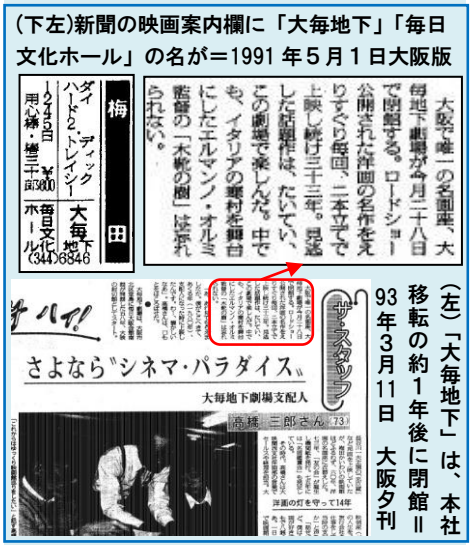
■　名画や文化人との出会い

毎日大阪会館には「大毎地下」という名画座があり、同じビル内の「毎日文化ホール」とともに、昔の映画を上映していました＝**右欄参照**。

私は1970年代後半、京都で大学生活を過ごしました。レンタルビデオもない時代。「祇園会館」や「京一会館」という名画座に入り浸ったほか、たまに京阪電車で大阪に遠征し、大毎地下に通ったものです。大阪本社への転勤で、「いつでも大毎地下に行ける」と喜びました。

映画だけではありません。マスコミが集まっていたため、多数の学者や文化人、芸能人も堂島を行き交っていました。私自身、レストランで食事していると、隣のテーブルで梅棹（うめさお）忠夫さん＝国立民族学博物館初代館長＝が談論風発していたり、作家の小松左京さんがいかにもエネルギッシュに歩いているのを見かけたりしたことがあります。「文化のかおり」が漂っているのが堂島の地の魅力でした。

(下左)新聞の映画案内欄に「大毎地下」「毎日文化ホール」の名が＝1991 年５月１日大阪版



(左)「大毎地下」は、本社移転の約1年後に閉館＝93年3月11日　大阪夕刊

■ われらがオリオンズ、辛さのインデアン

「かおり」の連想で、コーヒーの話にも触れましょう。毎日大阪会館には「茶房（さぼう）オリオンズ」という喫茶店があり、毎日新聞社内への出前もしていました。私もよくコーヒーを注文したものです。

この喫茶店は、1956（昭和 31）年に開店した際、本社が当時保有していたプロ野球球団・毎日オリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）にちなんで名付けたそうです**＝右欄参照**。オリオンズの選手も関西遠征時によく来店。主砲の山内一弘選手（後に阪神に移籍）はミックスジュースを愛飲し、「これを飲むとよく打てる」と話していたと聞きます。

飲み物が「オリオンズ」なら、食べ物は「インデアン」。毎日大阪会館には「インデアンカレー」という有名店が入っていました。

カツやエビなどのトッピングものはなく、ルーを味わう一本勝負。最初のひと口は甘く、次の瞬間に激烈な辛さが襲ってきます。「口の中が火事や」と叫びながらも、なぜかやみつきになる人が多く、昼食時など、社内のあちこちで出前を食べる姿がありました**＝写真③**。

旧社屋の跡地に建った複合ビル「堂島アバンザ」には、今も「インデアン」が出店しており、私も大阪出張の際には、つい顔を出します。

■ 赤い灯、青い灯、酔漢の哀歓

お酒の話も欠かせません。「大阪しぐれ」（都はるみ）や「大阪の女（ひと）」（ザ・ピーナッツ）など、数多くの歌謡曲の舞台にもなったネオン街・北新地**＝写真④**。そこに隣接して旧社屋はありました。

日が傾き、赤い灯、青い灯がうるむ頃、「スクープの祝い」と言っては繰り出し、「上司に叱られたうっぷん晴らし」と言ってはグラスを傾けました。安くておいしい店が多く、下戸の私も楽しめました。

社会部はここ、整理部（現・編集制作センター）はあそこと、行きつけの店も決まっていました。手元不如意でも、店主が「月給が出てからでいいよ」とか、「部長のツケにしておくから」と、気を利かせてくれました（道理で部長が「あの店は高い」とこぼしたはずです）。携帯のない時代でしたが、連絡態勢も万全。緊急の呼び出しや問い合わせがあると、店に電話がかかってきたり、同僚が探しにきたりしました。

「本社前を歩く北新地の芸者衆＝1955 年」という資料写真があります**＝写真⑤**。私は、さすがに社内で芸者衆を見たことはありませんが、和服をお召しの粋なママを本社玄関で見かけたことはあります。ツケの集金です。「三宅、オレは出張中にしておけ」とあわてる部長もいて、「小説に出てくるような光景が現実にあるんだ」と驚きました。

■ 屋台のラーメン「毎日軒」

社屋横の小路には、毎晩「毎日軒」というラーメンの屋台が出ていました**＝右欄参照**。２階にある整理部のほぼ真下になります。最終版の編集が終わった深夜、窓を開けて「おっちゃん、整理部にラーメンと缶ビール！」と叫ぶと、「あいよ」と返事があり、ほどなく岡持ちを下げたおじさんが、席まで出前にきてくれました。出入りのセキュリティチェックもゆるかったのでしょう。チャーシューやゆで卵などのサイドメニュー（というほどではないが）も豊富で、重宝しました。

本社移転の際、この店は「堂島に残る」と、付近の別の場所に移ったそうです。まだ店があるならもう一度食べたい、思い出の味です。

（左）「茶房オリオンズ」の特製コーヒーカップ。側面には、赤、白、青の横線にオリオンの三つ星を配し「Orions」と記した球団旗を描く

余録

「学生街の喫茶店」というヒットしたのは1970年代前半のことだ。「訳もなくお茶を飲み話したよ」と歌詞にあるように、喫茶店にたむろする若者の姿は学生街につきものだったが、そんな風景を目にする機会はめっきり減った▲小社大阪本社ビル1階の「茶房オリオンズ」も先週末で閉店し、60年余の歴史に幕を引いた。最盛期だった70～80年代に比べて売り上げは3分の1ほどに落ちたという。取材相手との待ち合わせや仕事の打ち合わせに重宝した場所だけに惜別の念を抱く▲日本

「茶房オリオンズ」は本社とともに西梅田に移転したが、3年前に閉店。左は14年4月28日朝刊「余録」

（下）③堂島の旧社屋で、出前のカレーを食べる編集者ら。ダイヤル電話や灰皿が時代を表す

④最近の北新地

⑤本社前を歩く芸者衆

本社移転の連載に「毎日軒」も登場した＝92年12月10日 大阪夕刊